



10月にボールウォーキングの講習会を開催。先頭は中島自治会長(上)。毎週金曜日の朝は「ころつえ」の前でラジオ体操のイベントを開催。もちろん、大倉さんも参加して、高齢者との絆を深める(下)



## 高齢者を孤立させない 〈大谷田の見守り電話・訪問〉



毎週1回、高齢者の安否確認のため「あんしんコール」の電話をかけるのも大倉さんの大切な仕事(上)。「ころつえ」の相談員の梅澤さん(写真左)と緊密に連携することで、高齢者支援の充実が図られている(下)



家が相談員として常駐している。相談員の梅澤京子さんは保健師だ。UR都市機構は足立区と連携して、「ころつえ」の運営に参加協力。生活支援アドバイザーの大倉さんは、「ころつえ」の梅澤さんとともに相談員も務めている。生活支援アドバイザーとは、UR都市機構が、高齢者の生活を支援する目的で委託し、現在、全国39団地に配置しているスタッフ。業務は、高齢者が抱える問題をヒアリングし、相談内容に応じて地

### 高齢者の交流の場が広がる

大倉さんは、見守りをよりスムーズに行うために、高齢者と触れ合う機会を増やしている。例えば、毎週金曜日の朝、団地内の広場で開催しているラジオ体操。高齢者向けの無理のない約30分の運動だ。当初は数人だった参加者が、今では50人近くに。続々と集

大倉さんは語る。「生活支援アドバイザーだけではとてもここまでつえ」と力を合わせて、高齢者が孤立しないような団地にしたいですね」

「団地内に生活支援アドバイザーがいて、『ころつえ』があることで見守りが充実し、さらに地域とのつながりも深まることで高齢者の安心感が増しています」と中島自治会長。大倉さんは語る。「生活支援アドバイザーだけではとてもここまでつえ」と力を合わせて、高齢者が孤立しないような団地にしたいですね」

## PART 1 大谷田一丁目団地(東京・足立区)※1 生活支援アドバイザーが 地方公共団体と連携して見守りを実施

「こんにちは。月イチ訪問です。東京都足立区の大谷田一丁目団地の廊下に、UR都市機構生活支援アドバイザー、大倉公子さんの明るい声が響く。それに応え、80歳代の柴田正夫さん、葉津子さん夫婦が玄関ドアを開けて、笑顔で迎えた。「苦勞さま。毎月ありがとう。変わりなく元気になってますよ」。大倉さんは毎月1回、団地内の高齢者の住居を1軒1軒訪ねて、安否を確認し、近況や健康状態を確認している。

### 見守り電話に加え訪問も

正夫さんは団地で行われたスキーマのストックのような専用ポールを使って歩くボールウォーキングの講習会に参加。早速、専用ポールを購入していた。それを玄関で目にした大倉さん。「すごい行動力!と褒めた。「私は頑張ってるよ!と褒めているけど、女房は足が悪くなってあまり歩けないから、

こうして来て声を掛けてくれるのは非常にありがたい」とにこやかに応じた。葉津子さんも「引越してきて間もないので知り合いも多くはないの。顔を見に来てくれる方がいると心強いわ」と話した。

方公共団体などの適切な福祉窓口につながることや、高齢者交流イベントの開催を通じて、地域コミュニティの形成をサポートすることなどである。そのほか重要な業務として、登録した高齢者に週1回、電話で安否確認をする「あんしんコール」がある。大谷田一丁目団地でも大倉さんが「あんしんコール」を行っているが、「ころつえ」と連携することで、月1回、直接顔を合わせる「見守り訪問」も実現した。

「生活支援アドバイザーだけでは、見守り訪問まで手が回りませんでした。「ころつえ」との連携で顔を見て話す機会ができて、健康状態などがよりはっきりつかめるようになりました。」(大倉さん)。

「見守り訪問」も実現した。「生活支援アドバイザーだけでは、見守り訪問まで手が回りませんでした。「ころつえ」との連携で顔を見て話す機会ができて、健康状態などがよりはっきりつかめるようになりました。」(大倉さん)。

「知り合いが増えて、あいさつを交わすようになった」終わってからお友だちとお茶に行くのが楽しい」と参加者の声。「この場をきっかけにカラオケに行ったり、井戸端会議をしたりと高齢者の交流の輪が広がってきています。うれしいですね。」(大倉さん)。

こうして来た声や、スポーツウエアに替え大倉さんはハイタッチで迎える。まると高齢者を、

こうして来た声や、スポーツウエアに替え大倉さんはハイタッチで迎える。まると高齢者を、



## 超高齢社会に向けて

# 安心して住み続けることができる 住まい・コミュニティを創造

UR都市機構では、超高齢社会の到来を前に、地方公共団体や民間事業者などと連携しながら、最期まで安心して住み続けることができる住まい・コミュニティを作り上げるため、多様な取り組みを始めている。その現状と、目指している将来像を紹介する。

※1 以外の写真=中村 晃 取材・文=船木麻里、本誌

大倉さん(一番右)と梅澤さん(一番左)は、ボランティアの助けも借りながら、約50人の高齢者の住戸を毎月1回訪問する

※1 大谷田一丁目団地: JR常磐線(東京外口千代田線直通)「亀有」駅徒歩18分、またはバス3分徒歩1分

将来、あちこちの団地でヤギを飼う？



**癒やし効果で高齢者にも好評**

東京・町田市の町田山崎団地で2013年9月から行われたヤギによる除草の実証実験。住民に対する癒やし効果も顕著だった。11月末に行われたサヨナライベントには子どもから高齢者まで多くの住民が集まった。「とてもかわいくて、癒やされました。散歩のとき、見るのが楽しみでした」との感想や、「今年だけでなく、ぜひとも毎年飼ってほしい。子どもにとっても、暮らしの中に生き物の姿があるのは非常にいいことだと思います」といった意見が聞かれた。(写真:望月仁)

**セカンドライフを豊かに!**

〈豊四季台の生きがい就労〉

団地住民に限らず、柏市民を対象にした就労セミナーを、東大IOGが7回開催。延べ約570人の参加者が集まった



**就労セミナー**

延べ約570人が参加

**保育・子育て・学童保育**

約30人が就労



豊四季台団地内にある幼稚園で絵本の読み聞かせを行う高齢者。近隣の幼稚園での就労のほか、小学生や中学生に英語を教える就労も実施している

**農業**

約50人が就労



団地内に設置された植物栽培ユニット(上)。中では白衣を着て働く。室内作業で、力仕事もあまりないため高齢者でも無理なくできる(左)。柏市内の農地で働く農業就労もしている(右)



◎団地内で介護サービスなどを提供



2013年11月に完成したアビリティーズ・ケアネットが運営する「デイセンターついで奈良北」(上)。リハビリ、入浴、食事、レクリエーションなど多様なサービスを提供する(右)



◎民間事業者が見守りサービスを提供



●安心お元氣コールサービス

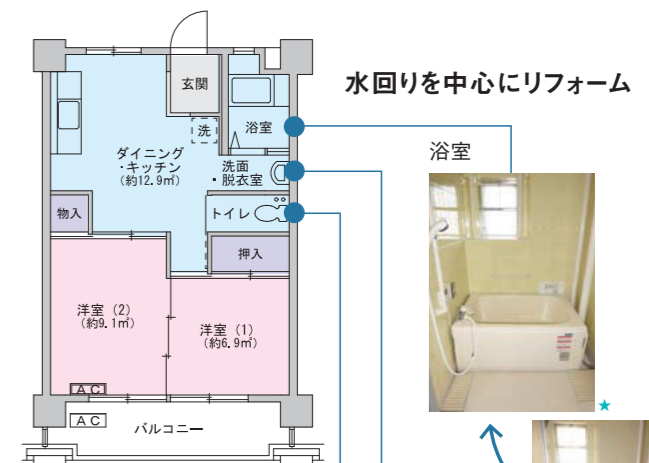
みまもり住宅では、民間事業者(アビリティーズ・ケアネット)が見守りサービスを提供する。毎日、電話で安否確認を行い、月1回、生活相談を行う

●生活相談サービス

**団地全体をケア施設に!**

〈奈良北のみまもり住宅〉

◎UR都市機構が高齢者向きの住まいを提供



水回りを中心にリフォーム



みまもり住宅は水回りを中心にバリアフリーに配慮した。浴槽は入りやすいように、またぎ高さを低くして、手すりを設置した(上)。洗面所やトイレは車いすでも利用しやすいように、ドアは引き戸や折戸に替えた(左)

トイレ

洗面・脱衣室

千葉県柏市の豊四季台団地の敷地の一角に、2013年4月、高さ2.5m、幅2m、長さ4.5mの大きな箱が2つ設置された。しばらくすると箱の中から、レタスや水菜などの野菜を運び出す高齢者の姿が見られるようになった。

八百屋の倉庫? それにしては働く高齢者の服装が、白衣に白い帽子で、食品工場の従業員のような。実はこの箱、屋内で野菜を作る「植物栽培ユニット」なのだ。

柏市、東京大学高齢社会総合研究機構(以下東大IOG)、UR都市機構の3者は、豊四季台団地を舞台に「長寿社会のまちづくり」プロジェクトを進めている。その柱の一つに「生きがい就労の創成」がある。就労のモデル事業の一例として、UR都市機構が敷地を提供し、東大IOGが民間事業者からユニットの寄贈を受け、高齢者が野菜作りに挑んでいる。

「生きがい就労」とは、高齢者が、生活維持のためではなく、セカンドライフを豊かに過ごすために、無理なく、楽しく、地域に貢献する働き方のこと。農業、育児、生活支援、食、福祉の5分野でモデル事業を行っている。

東大IOGが主催した就労セミナーには延べ約570人もの高齢者が集まった。その後、保育園などにおける育児就労、特別養護老人ホームにおける生活支援就労なども行われるようになった。

プロジェクトでは、もう一つの柱として在宅医療の推進にも取り組んでいる。今春にはサービス付き高齢者向け住宅と在宅療養支援診療所などを一体化した施設が完成。地域医療の拠点が動き出す。今後、就労支援や在宅医療を推進して、「地域で活躍しながら、いつまでも在宅で安心して暮らせるまちづくり」を目指す。

**PART 3 生きがいのために働いて無理なく、楽しく、地域に貢献**

**豊四季台団地(千葉・柏市)※3**

「ここに引越したおかげで、元気に歩けるようになりました」。清水桑博さん(92)は笑顔でこう話す。清水さんは、2013年7月に奈良北団地に越してきた。それ以前はあまり歩けなくなっていた清水さんが回復したのは、団地内に2013年11月に完成した「デイセンターついで奈良北」に週2日通いリハビリに励んだからだ。

同施設を運営するアビリティーズ・ケアネットの土平俊子執行役員は、「リハビリをすれば清水さんのように歩けるようになる方はたくさんいらっしゃいます」と話す。

「ついで奈良北」のオープンに先駆けて、奈良北団地では、高齢者を対象にした新しいタイプの住戸「高齢者向けみまもり住宅」の入居者募集を昨年、始めた。

「この募集は、高齢者の方に安心していつまでも暮らしていただけるように」団地全体をケア施設にするという構想実現に向けた第一歩です(UR都市機構担当)

みまもり住宅とは、高齢者が暮らしやすいバリアフリーに配慮した住宅をUR都市機構が用意、それに365日電話による安否確認を行うといったサービスを民間事業者が加える賃貸住宅だ。サービスを提供するアビリティーズ・ケアネットは、リハビリ、入浴、食事の提供などを行う「ついで奈良北」も団地内に設けた。

「みまもり住宅入居者以外の方にも、安否確認サービスを提供します。デイセンターも利用していただきます」と土平さんは話す。

緑に包まれた穏やかな環境の奈良北団地には、もともと診療所があった。そこに、今回、見守りと介護のサービスが加わり、高齢者の皆さんに暮らし慣れた場所で安心して住み続けていただける環境がさらに整いつつある。

**PART 2 安心して住み続けるための住まいとサービスを提供する**

**奈良北団地(横浜・青葉区)※2**